～和の風～ 町長随想

増澤 善和

天皇家と南越前町（六）

製塩

塩は米・絹と共に「租税の三白」だったり、大飢饉でも塩があれば生き延びるといわれてきたのはなぜだろう。

①塩と日本人

約四十五億年前に灼熱の地球が誕生。少しずつ冷えて表面に地殻を形成。内側のマグマが噴出（火山）して大量の水分（水蒸気）を放出。これが冷却されて雲となり大量の雨を降らせ、四十億年前には淡水の海ができた。長年にわたって降る雨は岩石成分を溶解して流れ、三十億年前には現在の１／10位の塩分濃度の海となり単細胞生物が出現。更に海水の塩分濃縮が進んで六億年前には現在の１／３（約１％）の濃度となり、多細胞生物も出現。更に三億年位前には、多細胞動物が少量の海水を体内に取り込み循環させて（血液）細胞を浸すことで陸上動物に進化することができた。従って私達地球動物は、血液を古生代の海水と同じ１％の塩分濃度に保つ―即ち、水と塩分は栄養ではなく、体内のすべての細胞を生かす環境づくりのための必須物質なのである。そのため肉食動物（肉を主食とする白人を含めて）は、肉に含まれている血液成分から塩分を摂取し、草食性動物は土や泥、更には肉食動物の尿などから塩分を摂取する。草食性（穀物や野菜）の黄色人種であるが、大陸では岩塩から、島国である日本人は海水からの塩分（海塩）を摂取してきた。私達は穀物や野菜を主食としてきたが、これらには殆ど塩分が含まれず、むしろ動物にとって有害なK（カリウム）が多い。このKを無害化するためにも塩分が必要となる。Kの多いジャガイモに塩をふりかけて食べるのは合理的である。このKをなくす塩は岩塩より微量成分の多い海塩の方が良い。

平成九年の法改正で日本での製塩も認可され、先日、四国での温室利用の自然海水製塩が報道された。

②継体天皇と敦賀地方の塩

大谷浦・大良浦など敦賀東浦からの塩が気比神宮に献上されたことは、前号の「養蚕」でも書いたが、この地方の塩は天皇家とも関係がある。

「日本書紀」の武烈天皇（継体天皇の先代）の条に「権勢をほしいままにした大臣平群真鳥（オオオミヘグリノマトリ）が、大友金村（オオトモノカナムラ）（継体天皇に上洛して即位するよう頼みに越前まで来た使者頭）に一族諸共殺されるが、死ぬ前に日本のあらゆる塩に呪いをかけて天皇の食料にならないようにした。ただ角鹿（敦賀）津の塩だけ呪いをかけ忘れたので敦賀の塩は継体天皇以降の天皇家の食用となり、その他の塩は天皇家の忌みたまう所となった」とある。古事記や日本書紀は神話的要素もあるので、この話の真偽は定かではないが、継体天皇が越前時代から敦賀の塩を愛用されていたとすればうなずける。では、敦賀地方の塩を越前内陸部の天皇に運んだ道は？

③塩の道・まぼろしの北陸道

古代大和と越の国を結ぶ道であるが、この時代旅をしたのは豪族か役人、又は米などの荷物を運ぶ人達と考えられるので、できるだけ舟を利用したと推測する。琵琶湖を舟で北上し湖北から陸路敦賀へ、ここから再び舟で東浦海岸沿いを北上し、大比田浦あたりで下舟、山道を山中峠～菅谷～菅谷峠（又は大谷浦か大良浦で下舟して直接菅谷峠へ）～大塩（国兼町）へ。

また、継体天皇を中心に考えれば、菅谷峠から真東の谷に降り奥野々～淑羅（サワアミ）（鯖波）～牧谷峠～阿味（味真野・鞍谷御所）となる。これらの道が海岸から越前中心部への最短道となり、一番古い北陸道でもある。この道を利用して、大良から五幡（敦賀）でつくられた塩が送られたと推理する。先年NHKの番組でも「塩の道・まぼろしの北陸道」として紹介された。この道には、鹿蒜のような駅がなかったので、後に北陸官道とならなかった。

④南越前町の製塩

日本各地では、縄文後期から土器鍋で海水を煮つめる製塩法が始まる。古代の大谷浦・大良浦でもこの方法だったが、塩木（海水を煮つめる薪）不足から争いが多かった。また大谷には製塩して大塩に送ったという天平元年（七五六年）の記録がある（当町最古の古文書）。中世から江戸時代の古文書（大谷～甲楽城）に塩田（塩畑・塩床・塩浜とも）と書かれた古文書が多数あり、海水を天日で濃縮して薪の節約をしている。また、大良には塩の専売権が認められた塩座があり、その売渡証文も六点残されている。当時の大良は砂浜も広く大きな塩田もあったらしいが、江戸時代中期頃から甲楽城断層の沈下が起こり、大谷区も含めて砂浜が縮小した。敦賀市史には、元比田浦などの当時の正確な塩田絵図が十七枚記されているが河野地区には残されていないのが残念である。

以上、南越前町と天皇家について書いてみたが、我田引水・独断と偏見が多い文となったようだ。門外漢が書いたものとしてお許しください。町民の皆様からのご意見・ご感想をお待ちしています。

三年後の全国植樹祭が福井県と決定しましたが、天皇家と関係の深い南越前町へ天皇皇后両陛下をお迎えすることを夢見ながらペンをおきます。

お詫びと訂正：六月号の今庄行在所
㊊後藤覚左衛門 ㊐後藤興右衛門